

日中友好新聞

読字 原田 鏡

No. 804

2016/ 8/5

日中友好新聞

発行所
日本中国友好協会
〒110-0005 東京都千代田区千代田1-1-1 1F(2C)室

日中友好協会
岡山支部
〒710-8256
岡山県北3-8-30 511
TEL:086(272)-3010
郵便番号1100
01250-0-3835

日中友好協会
倉敷支部
〒713-8911
倉敷市連島中央1-8-4 (宮地方)
TEL:FA3(086)446-2711

高齢者施設訪問と社会見学

一日中友好に有意義な一日

日中岡山支部 小林軍治

7月25日、中国・四国中国帰国者支援・交流センター(センター)主催の高齢者施設訪問・見学会が開催されました。

行程は、岡山駅西口を9時頃バスで出発し、(株)岡三食品(東区西大寺新地)の工場を10時〜11時ころにかけて見学し、12時から13時30分まで岡山駅西口の又来軒で昼食休憩をとりました。14時から15時30分まで、高齢者施設の小規模多機能住宅介護事業所「こころの里やまざき」(中区山崎)にあり、中国帰国

生まれは河北省、育ちは岡山

最初に訪れた岡三食品は、1999年に設立され事業内容は、天津甘栗・むき甘栗・焼き芋の製造・卸・販売をしています。以下、説明係の話とパンフレットをもとに紹介します。

この会社は、中国の河北省にある唐山山源食品有限公司と提携して、指定農場で自然の恵みと太陽の光をいっぱい受け、農家の人たちに有機栽培で大切に育てられた栗をもとに製造しています。現地では大きさを選別し



説明を聞く中国帰国者

炭でじっくり焼き上げ「ていねいに皮むき」洗浄・品質検査」の後に急速冷凍して岡山まで運ばれます。

岡山工場での作業工程は、
①原料選別室(受け入れ検査、洗浄・選別)、②包装室(自動計量・自動包装・X線遺物検査・重量チェック)、③ロトルト加工室(加圧・加熱殺菌)、④検品・梱包室(検品・箱詰出荷)の4工程です。

パンフレットでは、「おいしさに安全と安心をプラス」一粒一粒が私たちの自慢です。愛情いっぱい詰めてお届け!と記されています。私も、明るく衛生管理の行き届いている室内や働いている人々の姿を見て、パンフレットの記述通りであると思いました。中国帰

国者のみなさんは、覗き込むようにして説明を聞き、写真をいっぱい撮っていました。

食の安全性を確保し、日中友好の架け橋に!

各工程の説明を受けた後で、河北省の農家の様子がビデオで流されました。山根和枝さんは、私のふるさととなつたかのように話しました。

帰りがけに一袋500円の栗袋を二つ買っていました。最後に、案内係の若い職員が中国で栽培され、日本で製品に加工した栗が、安全でおいしい食べ物として、日本のお客様に届けることについて、日中友好の架け橋になりたい。」と話されたことが、心に強く残りました。なお、「こころの里やまざき」での交流については、次回で報告します。

① 原料選別室

② 包装室

③ レトルト加工室

④ 検品・梱包室

レトルト釜とは何?

ポイント

レトルト (retort) とは、もともと煎番釜という化学用語で、一般的には加圧下で100℃を越えて加熱殺菌することを意味します。この方法で殺菌された食品をレトルト食品と言い、その加圧殺菌処理を行う装置をレトルト殺菌装置 (加圧加熱殺菌装置) と言います。通常、100℃を越えて加熱殺菌処理をする場合に使用されます。レトルト殺菌装置の熱媒体は熱伝導率は水よりも高いので、大気圧のもとでは、熱水は100℃以上には上がりませんが、加圧下のもとで加熱を行い熱水を100℃以上にします。

日中友好協会岡山支部ホームページ
http://rzhong.biz/
メールアドレス
rzhong86@hotmail.co.jp



岡山弁護士会 シリーズ憲法講演会 No.8

18歳の日本国憲法

主権者としてこの国のあり方を考えるために

2016年8月6日(土) 15:30~17:30(開場15:00) 岡山国際交流センター2F 国際会議場

高退教作品展

—日本語教室の展示—



岡山県高校・障害児学校退職教職員の会（岡山高退教）は、6月27日から7月3日まで、岡山県生涯学習センターで、第18回作品展を開催しました。

この作品展は、会員の日常生活の中から生まれた絵画、写真、木工、書道、服飾・手芸などさまざまな作品を持ちよったグループ展です。

今回はじめて会員活動コーナーが設けられました。岡山高退教には、日中岡山・倉敷支部の会員・准会員が多数参加しています。

活動コーナーに、日中岡山支部の小林事務局長や井上進夫准会員が講師をしている「中国帰国者の日本語教室」（日本語教室10周年記念の集い。さいでん・高島教室。芳田日本語学習講座）の様子を展示しました。

岡山高退教第37回定期総会が開催された最終日には、日本語教室の展示を熱心に見てくれました。今後も機会があれば、展示して、中国帰国者の現状について知っていただければと思っています。

南シナ海問題について

長崎大学名誉教授 井手啓二

海は誰のもの

領土・領海をめぐる争いは、「子供喧嘩」以上のものにならない。当時国それぞれに言い分があるためである。

海は誰のものか、誰のものである、どの国のもでもないというのが中世までの人間の観念であつたろう。ところが大航海時代以後は、各国は軍事力で海上支配を競うようになり、野蛮化する。

南沙問題で当事国でもないのに、日本は自衛隊をヴェトナムとの軍事演習に参加させるまでになった。安倍内閣だけでなく、マスコミも迷走している。国民にとり迷惑な話である。

起源は戦後の未処理

南シナ海問題の当事国は7カ国・地域である。ざっといえば19世紀後半以後、南シナ海を支配したのは帝国主義フランス、ついで日本。日本帝国主義は、新南群島として、そして日本敗戦後は中華民国である（周辺の独立国は中国のみ）。

戦後処理において、南シナ海の国境は定められなかった。戦後インドシナ半島に無い戻ったフランスと中華民国が支配を争った。

その後独立し周辺諸国はそれぞれに領有権を主張し始め、石油・天然ガスの埋蔵が確認されるに及んで1970年代以後、南シナ海は「摩擦の海」と「友好の海」の間を揺れ今日に及んでいる。

いずれの国も領有権を主張するのはむづかしい。南沙に限れば、戦後、先占し、実効支配している島嶼が多いのは、ヴェトナム、フィリピン、中国、マレーシア、台湾の順であろう。最大の島、太平島は台湾が支配している。

各国は埋め立て、施設拡充を進め、現在も続行している。中国だけではない。というより中国は海洋進出の後発国に位置する。だが中国・ヴェトナムの全域領有の主張の歴史的根拠は帝国主義時代に淵源をもつ。

南シナ海の小島・砂州の歴史を紐解けば複雑極まりない。紛争後にできた現行の国際海洋法では問題は解決しない。何人も国境確定はできないであろう。7カ国・地域が平和的に話し合う以外にない。

当事国は紛争の一方で南シナ海の共同開発や協力も進めてきた。中国とASEAN諸国の協力はますます拡大してきたのがこの四半世紀の歴史である。紛争当事国は02年に

岡山市9条の会連絡会の総会 と学習会・交流会

◎日時：8月20日（土）14：00～17：00

◎場所：林病院ひまわりホール

◎内容：①1年間の活動の報告

②各地域9条の会の活動の交流

③今後の取り組みについて

④その他

自ら決めた自主解決の取り決め（行動宣言）を厳守すべきである。

日米の介入は不当

当事国でない国々、とくに米・日はいずれの国にも肩入れをしてはならない。まして今、そうしているように軍事的対応を強化して紛争に油を注いではならない。

非核・平和の共同体の構築を掲げるASEANは、米・日・中より賢明である。争いへの介入は、後日、日本のアジア

からの孤立をまねくだけである。

（この文章は、5月21日に開催された倉敷支部の「中国問題文化講演会」のとき、資料として配布されたものです。）

次回の新聞発送作業は
8月12日（金）午後3時から
民主会館2階で行います。
前回お手伝いくださった方です。

稲葉 和
小林 内
小竹 内
竹内 製
坪井